<table>
<thead>
<tr>
<th>タイトル</th>
<th>論説試論 ガーナ・コブリソ村における「原体験」の客観的普遍性の論証にむけて</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>細見 眞也</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>季刊北海学園大学経済論集 51(1): 1-14</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>2003-06-30</td>
</tr>
</tbody>
</table>
試論：ガーナ・コブリソ村における「原体験」の
客観的普遍性の論証にむけて

細 見 眞 也

はじめに

私は、ガーナのコブリソという名の村において1962年に遭遇した「原体験」に触発されて、そこの今日までコブリソ村の人びとはどのような人間観を持っているのかという問題を中心に、彼らの価値観を構成する自然観、社会観、言語観などを考察してきました。そして、コブリソ村のあいだには「人間というものは、無意識のうちに、けちや間違いを犯しやすい弱い存在なのだ」という人間観が共有されてきたのではないか、という事実的な結論を発表してきました剣兼

しかし、私が拙稿（2001）において指摘した人間観は、1962年の11月という時点でガーナ南部のコブリソ村において、文字どおり偶然に発生した出来事（私の言う「原体験」）にもついて、私が推論によって導き出した人間観であり、その出来事は事実には違いありませんが、時間的にも空間的にも非常に限定された特殊な経験ですから、その推論がアフリカ人すべてに共通する普遍的な人間観であることを示す客観的な論拠に欠けていることを認めざるを得ません。

その意味において、私が指摘した人間観は、あくまで、一つの仮説に過ぎないので、それは客観的事実にもとづいた推論ではありませんから、普遍性が欠如しており、科学的な仮説であるなどとは言えません剣兼

そこで、本稿では、この「原体験」そのものが客観的事実であると言えるか否かを検討することを通じて、私の推論した人間観がコブリソ村の住民だけでなく、私たちすべてに該当する普遍性をもったものであることを論証するための一助にしたい、と思います。

ところで、私の「原体験」が客観的事実であることを論証するために必要なことは、この経験のどこが主観的なものであり、どこが客観的普遍性を欠いているのかを明らかにすることから始めなければなりません。

そこで最初に、この「原体験」を構成する出来事のなかで主観的なものは何であったのかを探しますと、その一つは、当時コブリソ村の村長代理であったコフィ氏から質問を受けたときに私が感じた「強烈なショック」という感じ（知覚）であることがわかります。

なぜかと言えますと、例えば、複数の人が同じ地震を経験したとしても、ある人は気持ちが動転してしまって身体がまったく動かないほど強烈なショックを受ける場合があるかと思えば、別の人は、比較的冷静に落ち着いて避難行動が出来る場合があるというように、経験とか体験は同じであっても、その経験から受けたり感じるショックの程度には大なり小なりの違いがあると、考えられるからです剣兼
そのように、経験や体験によって感じるショックの程度に個人差があるとしますと、ある経験が「私にとって強烈なショックであった」と言いましても、それはあくまで個別特殊な経験であり、人間であれば誰でも、いついかなる場合でも必ず強烈なショックを感じるなどとは言えないのです。その意味で、私が感じた「強烈なショック」いう感覚や知覚は、あくまで主観的なものであり、普通性を欠いていると言わざるを得ないのである。

さらに、この「原体験」には客観的事実であることを論証しなければならない主観的な事実があります。それは、私が「強烈なショック」を感じる原因となったコフィ氏の「苦難」そのものが客観的実事であるか否かという問題です。コフィ氏の苦難によって、私が「強烈なショック」を受けたのは確かに客観的事実ではありませんが、その苦難が事実として認められたという客観的な論証やコフィ氏が苦難しなければならない必然性を示さなければ、私の言う「原体験」そのものが根拠のない空理空論にすぎなくなるからです。

このような考えにもとづいて、本稿では、次のような問題に焦点を当てて、検討したいと思います。そのひとつは、コフィ氏の苦難によって私が受けた「強烈なショック」が一定の条件を共有している人間であれば誰もが感じるショックであり、客観的な普遍性をもっているのではないか、という問題です。また、コフィ氏と同じような状況に置かれた人間であれば、コフィ氏に限らず誰もが「あるような苦難を経験し得なかった」のではないか、という必然性の問題です。

（注１）細見真也著『発展途上の研究と人間観について』、(株)の農民から教えられたこと」(「北海学園大学経済論集」第48巻 第3・4号、2001年3月、p.28)
なお、本稿では、この論文を拡充（2001）と略称する。

（注２）科学的論文には客観性の保証がなければならないうことを長尾氏も次のように述べている。
「科学は誰にも理解され、科学的実験は誰がおこなっても同じ結果が再現できることが必須の条件であるといえるだろう。つまり、科学においては客観性が高まるべきではないわけではない。そのためには、科学の論文はまちがいのない論理にしたがって論議と推論におこない、観測や実験などによってその結果が再現できるものでなければならない。実験においては実験の材料は条件、そして実験の結果が正確に記述されて、誰もがこれを追試（追いかけ実験すること）できなければならないわけではない。」(長尾 真真「「わから」とは何か」岩波新書、2001年、p.103)

（注３）この点について、内田枝夫氏は次のように指摘している。
「知覚や観察（経験）は、確かな知識の根拠を欠く出発点として欠かせないものですので、対象が同じであればそれらに同じというわけではなく、必ず主体による意味づけを伴い、主体の持っている何らかの「理論（先入観的なものを含めて）」に依存します。（中略）しかし、それに対しても、理論の影響をまったたく受けずに何らの意味づけも伴わない、純然たる知覚や観察をすることはできません。その意味で、科学の発展段階、人の所属する文化、また生育環境が異なった場合のように）時代や場所や人が異れば、同じ事物を眺め「同じ」事件に出会っても、「経験」され理解される内容は異なるかもしれない、ということに留意しておく必要があります。」(内田枝夫『人間理解の基礎』晃洋書房、2002年、pp.40-41)

Ⅰ．コフィ氏の苦難が、なぜ私に対して「強烈なショック」となったのか

(1) 「原体験」の概要
この疑問を考察するためには、改めて「原体験」の概要を述べることから始めなければなりません。
これは既に拙稿（2001）のなかで説明したことですが、ガーナのココア生産農家の経済的実態を調査するために訪われたコプリソ村で私は、村の広場に集まった50人ほどの村人たちを前にして、初対面の挨拶を兼ねて、次のように述べて調査に協力してくれるよう依頼しました。

すなわち、コプリソ村のココア栽培農家の経済状態を調べるために、これから一軒一軒の農家を訪ね、その家族全員の氏名から性別、年齢、学歴をはじめ、所有している農地の面積や栽培しているすべての作物について、その生産量から販売量、販売額も含め、それらの作物の生産費にいたるまで、多種多様な項目について聞き取り調査したいので協力してもらいたい、というように述べました。

私の挨拶と説明が終わった直後に、それまでは静かに私の話しを聞いていたコフィ氏が私に向かって、次のように質問してきたのです。

それは、「聞くところによれば、あなたは日本からガーナ大学へ留学してきた研究者であって、ガーナ政府の役人ではないということですが、政府の役人でもないあなたのような人が、なぜ、そのような内容の調査をしようとされるのですか？あなたは調査の目的は何なのかを、私たち村人に説明していただけないでしょうか？」という内容の質問であった、と私は記憶しています。

コフィ氏の質問は、今からおよそ40年も前に受けたものであり、その時の私が文学どおり《虚を衝かれた》と感じるほど強烈なショックを受けたのは珍しい事実だったとしても、その質問の内容を正確に記憶しているという客観的な論拠を示すことができず、読者諸賢に入念に納得してもらうことはできませんでした。その論拠は、のちに述べてとして、ここでは、その質問の「どの部分」に私が強烈なショックを感じたのかを改めて考えてみたい、と思います。

(2)「強烈なショック」の実体・原因

先に私は、コフィ氏のこの質問が《虚を衝かれた》と思うほど強烈なショックを私に与えたと言いましたが、私たち人間が《虚を衝かれた》などと感じるのは、いったいどのような場合なのでしょうか。私の推測によれば、それは、自分にとって予想外の出来事が発生したり、そのような出来事に遭遇したような場合に感じるのではないか、と思われます。

この推測がそれほど大きな間違いではないとしますと、当時の私が「コフィ氏は、私たちに対して、調査の目的を尋ねてくることは、ないだろう」と予想していたのではないでしょうか。

この場合、重要なことは、それが良くまで自分の「不確かな予想」であるにもかかわらず、当時の私はそれが「不確かな予想にすぎない」という事実を意識しておらず、その事実に無意識であり無知であったのではないか、ということなのです。

なぜ、そのような推測が成り立つのかと言えば、私たちは、それが「不確かな予想にすぎない」ことを意識したり自覚していれば、たとえ予想外の出来事に遭遇したとしても、ただ単に「自分の予想が不確かったから外れただけだ」とか、「自分の予想が間違っていただけだ」と考えて、自ら容易に納得することができますから、その出来事から強烈なショックを受けることは少ないからです。つまり、私たちは、それが「不確かな予想にすぎない」とことを自覚していてから、その結果として発生する出来事が予想外のことであったとしても、《虚を衝かれる》ほど強烈なショックを受けることはほとんどない、と言えるのではないでしょうか。

そのように考えますと、コフィ氏の質問に対して私が《虚を衝かれた》と思うほど強烈なショックを感じたのが事実であるとすれば、当時の私はコフィ氏が「調査の目的を尋ねてくることではない」という自分の予想について、それが「不確かなものだ」とは自覚しておらず、む
しろ逆に「彼は絶対に質問などしてこない」などというような確信（実際には、根拠のない妄信）を持っていた、という推測が成り立つのではないでしょうか。
そこで次に問題となるのは、当時の私にはなぜ、自分の予想が「間違い易い不確かなものだ」などという自覚や意識なかったのか、という疑問です。
この疑問を考える場合、コプリソ村での「原体験」そのものが一つのヒントになるのではないかでしょうか。つまり、私の「原体験」がものがたっているように、自分の予想が大きく外れるような「苦い経験」を味わうことによって、はじめて私たちは実際に自分が「不確かな予想をしていたにもかかわらず、それが「確実なもの」であるかのように妄信したり錯覚していたという間違いに気づくことができる、と言えるのではないでしょうか。
このように考えますと、1962年にコプリソ村で「原体験」と呼べるような出来事に遭遇するまでの私には、自分の予想や推測が大きく外れるような「苦い経験」が無かったという推測が成り立ちますから、その推測自体が実事であるかどうかを検証しなければならないことになります。言い換えれば、それまでの私には「調査の目的」などを尋ねられなかった、と言えるか否かを考察しなければなりません。

(3) 「強烈なシック」の真相は何か

先に私は、1962年にガーナのコプリソ村で遭遇したような「調査の目的を尋ねられる」などといった経験が、それまでの自分には無かったのではないか、と申しました。
そこで、改めて振り返ってみますと、次のような事実があることに気づくのです。
すなわち、学生時代の私は、大学の農学部で農村経済学科に在籍していましたが、そこでは必修科目として農村調査実習が課せられていた。そのため、私も同級生たちと同じように指導教官の指示に従って、神奈川県の伊勢原市とか宮城県の詰農家やタバコ栽培農家などを訪ねて、農村調査実習をしました。
その実習というのは、私たち学生が指導教官から割り当てられた数軒の農家を個別に訪問して、それぞれの農家の当主（世帯主）から次のような調査項目に聞かされ調査をしたうえで、それらのデータを調査票に記入していくというものでした。
私の記憶によれば、その時の調査項目には、当該農家の家族全員について、その氏名から性別、年齢、学歴をはじめとして、就学状況や就業形態はもとより、その農家が栽培したり所有している作物や家畜について、その種類から生産量とか販売量や販売額、さらには保有している農地の面積やその利用関係に至るまで、多種多様なものが含まれていました。
このようにプライバシーを侵害しかねないような項目まで調査しようとしていたにもかかわらず、農家の当主たちは、ほとんど誰ひとりとして「何の目的のために、このような調査をするのですか？」などと質問していきました。
大学を卒業したのち、私は世界の発展途上国（当時は「後進国」とか「低開発国」という呼び方が一般的でした）を調査研究するために設立されたばかりのアジア経済研究所に就職し、2年間の研修を終えたあと、研究所の海外派遣員として西アフリカのガーナ大学大学経済学部へ留学することになりました。留学するに当たって、私は「ガーナにおけるココア農業と経済発展」という研究テーマを策定し、このテーマで研究を進めるためガーナではココア栽培農家の経済調査をおこなう予定があることも研究会の場で説明しました。
ところが、この研究会の席上でも、出席していた同僚の研究員たちはほとんど誰ひとりとして、
私の研究や調査の目的が何なのかを質問してくることがなかった、と記憶しています。
このように見えてきますと、1962年にガーナのコヴィシ村を訪れるまでの私には、自分の調査や研究について、その目的が何なのかを正確に語られることができなかったことに改めて気づくのです。
だから、ガーナ大学へ留学するまでの私が自分の研究や調査の目的について質問を受けるという経験があれば、その時点で自分には明確な学問研究上の目的がないことを痛感に意識したり自覚することが出来たはずですから、たとえコヴィシ村でコヴィシ氏から質問されても、あれほどまでに強烈なショックを受けることもなかったのではないか、と考えられるのです。
ここに至って、コヴィシ氏の質問がなぜ、「嘘を衝かれた」と感じるほど強烈なショックを私は与えたのかという本当の理由が明らかになったのではないでしょうか。それ故に一言でいえば、当時の私がコヴィシ村の人びとの前で自ら「研究者である」と公言していたから、自分には調査・研究をおこなうための明確な学問上の目的がないことをコヴィシ氏の質問を通して痛感に意識したり自覚せざるを得なかったという意味で、お粗末で恥ずかしい自分の姿に気づかされたところが、強烈なショックの真相であったと言はばかりありません。
この事実は、それまでの私には、自分が調査や研究の内容について説明してもその目的が何であるかなどというような調査研究の前提について「質疑応答しない」のを常識としている社会のなかに置かれてきたのではないか、という推定が成り立つのではないでしょうか。
これもまた、私の非常に限られた経験にもとづいた推測にすぎませんから、普通の客観的な事実にもとづいて、私たち日本の研究者のあいだには研究や調査の前提とも言うべき目的について「質疑応答しない」のが常識となっておりました、と言えるのか否かを検討しなければなりません。

(4) 公開の場での質疑応答を軽視する日本のアフリカ研究者

今の私から見れば恐るべきことです、例えば私が過去40年間にわたって所属してきた日本アフリカ学会では、毎年一回、全国各地の大学を会場にした学術大会が開催され、毎回多数の研究発表がおこなわれますが、少なくとも私の知らないかぎり、それらの研究や調査の前提となっている目的をめぐって質疑応答や議論がおこなわれた、という記憶がほとんどありません。
これは、あくまでも私の記憶によるものですから、間違いや錯覚の可能性があることを否定することはできません。そこで、私たち日本のアフリカ研究者が必要な学会大会という「公開の場」で、調査や研究の前提である目的について質疑応答や議論をしてきたか否かを客観的な事実にもとづいて検討しなければなりませんが、私はその具体的な前提のひとつとして、研究発表の時間制限を取りあげてみたい、と思います。

私の記憶によれば、日本アフリカ学会でおこなわれる個別の研究発表は質疑応答の時間を含めて、ほぼ15分程度に限られてきました(43)。しかし、多くの場合、研究発表だけでなく制限時間が終わってしまうに、時には制限時間を超えてしまったりに司会者（座長）が早く終了するようにベルを鳴らして注意を促しているにもかかわらず、なお発表を続ける場合も少なくありませんでしたから、この15分という制限時間に質疑応答まで終えた研究発表は、非常に少なくなかったのではないかと思います。
このように質疑応答が制限時間内におこなわれなかった場合、司会者は「時間がありませんから、ひとつだけ質問を受け付けます」とか「質問できなかった人は、個別に直接、報告者に質問してください」などと言う場合が、少なくなかったと思います。
つまり、私の記憶によるとかぎり、日本アフリカ学会の学術大会では、公開の場での質疑応答や
議論が非常に軽く扱われてきた、と言わざるを得ないのです。言い換えれば、そこでおこなわれ
る研究発表は、その多くが公開の場での質疑応答や議論を経ないまま、発表者の「一方的な」説
明だけに終始してきたのではなかったか、と思います。

これは、発表される研究内容に関して、異論や批判的な意見などが存在するとか、その可能性が
学術大会のような公開の場でおくことなるかぎりの質疑応答や議論を通じて客観的事実として共有され
ることなく、非公開のまま「閣から閣へと墓られてきた」ことを意味している、とも言えるで
しょう。それは、発表された研究内容とそれを構成する言葉や用語について、多様な解釈があり
得ることや、自分とは異なった理解の仕方や考え方があるということ実を私たち日本のアフリカ
研究者が共有する機会が著しく制限されており(43)、「なぜ、そのような解釈ができるのか？」
などという疑問を感じるなうとして、自分の考えを相対化するのに必要不可欠な機会や動機が制約
されたり否定されてきたことを意味している、と考えることもできます。

この場合、その言葉や用語の解釈に対する疑問は、あくまでも自らの経験的事実にもとづく
推測を通じて自ずからいわば必然的に出てくるものであるとしますと、多様な解釈や理解の仕方
があり得ることを知る機会が無いということは、私たち日本のアフリカ研究者が自分の経験的事
実が持っている限界について無知のまま、つまり自分の個別特殊な経験を見偏化することなく、
あたかもそれが絶対普遍の解釈であるかのように錯覚したり妄信してしまう危険が非常に強いこ
とを意味しているのではないでしょうか。

その具体的な証拠のひとつとして、「コフィ氏は調査の目的を絶対に廃してはならない」
という私の言葉を挙げることができるでしょう。

そのように自分が妄信していたことを痛烈に意識させられる「苦い経験」を契機として、先に
述べたような危険があることに気づくことができましたから、私は 2002 年度の日本アフリカ学
会第 39 回学術大会において「アフリカ研究の今日の意義について考える」と題する報告をおこ
ない学会の在り方を批判しました(44)。

この報告内容については、別の機会に論文として発表する予定ですが、ここではその内容の一
部を述べたいと思います。

この学会発表で私は、赤坂 賢・日野聡也・宮本正興編『アフリカ研究：人・ことば・文化』
（世界思想社、1993 年）に収録されている 5 編の論文を取りあげて、検討しました。

この結果、ある程度は予想していませんが、実際に驚くべきことがわかりました。すなわち、あ
る研究者（仮に A 氏と呼んでおきます）は「歴史のなかの民族誌」と題する論文のかなで、次のように述べています。「独立後のスーダンや帝政と社会主義体制をへたエチオピアにおいては、
ナイル上流部の民族集団は国家の体制のなかで、政治経済的にも文化的にも『周辺化』された存
在になった。周辺化は、外部勢力との接触がはじまった段階から進行していたと考えられが、
その制度化が完成したのは現代の国家の枠組みのなかにおいてであろう。この状況下では、周辺
化された民族集団が国家のコントロールする資源（たとえば教育と就職の機会、医療、そして外
国からの援助など）にアプローチする機会は、きわめて限られている」(下線＝引用者、同上書、
p.195)

このように A 氏は「国家がコントロールする資源」の例として、「教育」とか「就職の機会」
や「医療」、さらには「外国からの援助」などを挙げていますが、この「コントロールする」と
いう言葉を仮に「支配、管理、あるいは統制する」という意味に解釈しても間違いないではない
としますと、A 氏は「教育というものは国家が管理したり統制しているのだから」という考えや認
識が改めて理由を説明する必要のない常識として、いわば暗黙の前提となっている、と言ってもよいでしょう。

確かにA氏の言う「教育」という言葉を学校教育（あるいは、学校でおこなわれる教育というように）に限定して使うならば、そこでの教育が国家の管理や統制を受けていると言っても間違いではないでしょう。しかし、子供が家事や農作業などを「手伝う」ことを通して経験的に学び身についての知恵も「教育や訓練」の産物であるとしますと、教育には国家や政府の統制や管理とは無関係におこなわれるものであると考えられますから、A氏のように「教育は国家のコントロールしている」とは言えないのではないかでしょうか。

このように考えると、「教育」だけでなく「就職の機会」とか「医療」などといった言葉や用語についても、この論文の筆者であるA氏が具体的にどのような意味を込めて、これらの言葉を用いているのか、その暗黙の前提について疑問がでてくるのです。例えば、「医療」という場合、アフリカに限らず、世界各地の人間社会では国家が公式に認定する資格や医師免許を持たない人物（しばしば「伝統医」とか「巫術師」などと呼ばれますが）が薬草などの民間医薬を用いておこなう「民間療法」などと呼ばれる「医療」があることは広く知られていますが、このような民間療法と民間医療はともに一つの「医療」に違いないとしますと、国家のコントロールが及ばない医療が存在することになるのではないかでしょうか。

それでは、京都大学の大学院を修了するほどきわめて高い学歴と豊富な学識を持っているA氏ほどの人物が、なぜ、これほど単純な間違いを犯してしまうのでしょうか。

これは、あくまで私の単なる想像に過ぎませんが、原因のひとつはA氏が自分の受けてきた学校教育こそが教育であり、学校以外でおこなわれるものは教育とは呼ぶに値しないものだと考えているためではないでしょうか。さらに言えば、A氏は「学校教育とは何か」などという問題を考えたこともなかったのではないか、ということです。

なぜなら、「学校教育とは何か？」などと考えるということは、言うまでもなく、その前提として自分が受けている（あるいは、受けたことのある）学校教育に疑問を感じなければならないし、それは、学校に通することで「辛くて、苦しい」という経験によってはじめて出てくる学校教育に対する根本的な疑問ではないか、と思われるからです。

その意味で、A氏が用いた「教育」という言葉には、この言葉を幅広く解釈するために欠くことのできない学校教育にまつわる「苦い経験」が無かったのではないか、という推測が成り立つように思われるのです。そのため、A氏は教育という言葉を深く考える必要や契機がなく、この言葉を「学校教育」などというように具体的に限定してい、いわば「安易に使う」はなかったのではないでしょうか。

ここで取りあげたのは、きわめて限られたひとつの事例にすぎませんが、この例を見ても容易にわかるように、抽象的な言葉や用語を具体的に解釈するためには、その言葉にまつわる「苦い経験」が言葉の意味を限定的に解釈するための具体的論拠として必要になるのではないかでしょうか。

しかし、私たちが用いる言葉や用語はほとんど無数に存在しており、そのすべての言葉について「苦い経験」をすることは不可能ですから、私たちは具体的な経験にもとづいて解釈しないまま（つまり、具体的な意味を知らないまま）言葉を使わざるを得ないのでしょうか。

これが事実だとしますと、私たちが抽象的な言葉を具体的に解釈するのに必要な「苦い経験」を欠いたまま抽象的に言葉を使う場合には、断定的な表現を意識的に注意深く避けるという慎重
な配慮が必要だということになるでしょう。

そのように、抽象的な言葉に対する配慮や慎重さ、「苦い経験」という具体的な根拠に欠けていることを第三者からの質問によって気づかなければならないものはありませんから、抽象的な専門用語（学術用語とも呼ばれる）を使わざるを得ない私たち研究者にとって、第三者との質疑応答が必要にして不可欠なものだということを容易に理解し、納得することができるのではないか。

（注1）アジア経済研究所では、すべての海外派遣員に対して、留学する直前に定例の研究会において研究計画を説明することが義務づけられていた。なお、毎週水曜日の午後おこなわれるこの研究会には、研究所の所長や理事などの役員をはじめ、先輩や同僚の研究者が毎回15〜20人以上出席するのが恒例であった。

（注2）毎年発行される「日本アフリカ学会 学術大会・研究発表要旨」に掲載されているプログラムを見れば、個別の研究発表が15分という時間内でおこなわれることが明記されている。

（注3）日本を代表する水俣病研究者のひとりである原田正純氏は、昭和47年6月にスウェーデンの首都ストックホルムで開催された民間の国際環境会議に参加した時の感想を述べるなかで、医学者の学会でも論議不在であることを次のように指摘している。

「ストックホルムではいろんな人に会った。学者あり、市民あり、学生あり。私の不思議な言語力ではとても水俣病の医学的な実態を全部話することはできなかった。しかし、相手が本当に解るうとして接してくれるとき、言語を越えた意志の通じ合いを感じた。（中略）形式的な学会、討論不在の学会に慣れていた私にとって、この自由で形式にかだわらない環境構築における集会や討論会は実に魅力的であった。」（原田正純『水俣病』岩波新書、1996年、p.221、下線＝引用者）

（注4）『第39回日本アフリカ学会 学術大会・研究発表要旨』（p.57）

II. コフィ氏の質問は、客観的な事実であったと言えるのか

この疑問は、当時のコフィ氏には「調査の目的」を私に尋ねなければならない客観的な必然性があったと言えるのか、というようにも言い換えることができます。そこで、この疑問を検討するためには、コフィ氏の質問の内容を改めて考察しなければなりません。

まず最初に、コフィ氏の質問を再現してみますと、彼は私に対して「聞くところによれば、あなたは日本からガーナ大学へ留学してきた研究者であったので、ガーナ政府の役人ではないということですが、政府の役人でもないあなたのような人が、なぜ、そのような内容の調査をしようとするのですか？あなたの調査の目的が何なのかを、私たち村人に説明していただけないでしょうか？」という旨の質問をしてきたのです。

ここでコフィ氏が私に尋ねたことは、言うまでもなく、私の調査目的は何かという点です。そのように、コフィ氏が私の調査目的を尋ねたのが事実であるとしますと、当時のコフィ氏には私の説明を聞いても目的が何であるか理解することができなかったことを意味していますから、彼が「私の調査目的を理解することができなかった」のが客観的事実であることを確認しなければなりません。

それでは、コフィ氏は本当に私の調査目的を理解していなかった、と言えるのでしょうか。この疑問を解明するためのヒントとして、「ガーナ政府の役人ではないということですが、政府の役人でもないあなたのような人が、なぜ、そのような内容の調査をしようとされるのですか？」というコフィ氏の言葉に注目したいと思います。
この問いかけの言葉は、「あなた（私＝細細）がガーナ政府の役人であるというのであれば、
調査の目的が何であるか、私（＝コフィ氏）にはわかっています。しかし、あなたは、政府の役人
ではなくガーナ大学の研究者だということですから、なぜ、あなたのような大学の研究者が政府
の役人と同一ような内容の調査をするのか、あなたには学問研究上の目的があると思うのですが、
その目的が私には理解できないのです」というように言い換えることができるのではないでしょうか。

仮に、このような言い換えや解釈が間違いないとしますと、次のような疑問が出てきます。
その疑問というのは、当時のコフィ氏にはガーナ政府の役人がおこなった調査について、その目
的を知る機会があったと言えるのか、ということです。これを、もう少し厳密に言えば、私がコ
フィ氏と出会った 1962 年 11 月の時点で、既にコフィ氏には私と同じような内容の調査をするた
めにコプリソ村にやって来た政府の役人と会話を交わすなどして、その調査の目的を尋ねることができたような機会があったと推測することが可能なのか、という問題です。

さらに、そのような機会がコフィ氏にはあったと推測する場合、その根拠は何なのか、という
点についても検証しなければなりません。

これらの疑問や問題点を検証するためには、当時の私がどのような項目について調査しようと
していたのかを確認しておくことが必要だと思います。そこで明らかになったことは、私がコプリ
ソ村で調査しようとしていた項目には、農家家族全員について、その氏名から年齢、性別、
学歴、就学状況、就業形態などが含まれていましたが、これらの調査項目はガーナ政府が全国規
模で実施してきた「人口センサス」（Population Census）の調査項目と基本的には同じもので
あった（※1）、という事実です。

この事実は、コフィ氏が私の調査内容（または、調査項目）の説明を聞いたとき、その調査項
目が政府の役人（つまり、「人口センサス」の調査員）がコプリソ村で調査した項目とほとんど
「同じだ」と受け取った可能性が高いことを推測する根拠になるでしょう。

そこで、次に問題となるのは、実際にいつの時点でコフィ氏が「人口センサス」の調査員
（enumerator）と出会ったのか、ということです。ガーナ政府が実施してきた「人口センサス」の
時期を調べてみますが、独立後のガーナで最初に「人口センサス」が実施されたのは 1960 年で
あったことがわかります。

これらの事実から、私たちは、コフィ氏が「人口センサス」の項目を調査するためにコプリソ
村を訪ねてきた調査員と直接、出会うことができたのは 1960 年であった、と推測しても間違い
ないと思われます。しかし、この推測が間違いないと言うためには、さまざまな条件や可能性を
考慮しなければなりませんが、そのなかでも特に重要なことは、この時の人口センサスでは、
どのような調査方法が採用されていたか、という問題です。

なぜ、「人口センサス」の調査方法が問題なのかと言えば、たとえば日本の「国勢調査」のよ
うに、あらかじめ各家庭に配布されている「調査票」に世帯主が自分でデータを記入し、その
「調査票」を国勢調査の調査員が回収するという調査方法であれば、世帯主が調査員と直接会っ
て「会話する」必要はありませんから、調査員と世帯主が会話を交わす機会は非常に少ない、と
考えられるからです。

そこで、コフィ氏が「人口センサス」の調査員と直接、出会って「質問する」ことができたか
否かを考えるためには、ガーナ政府が実施した「1960 年人口センサス」で採用されていた調査
方法がどのようなものであったかを確認しなければなりません。
この点について、結論的に言えば残念ながら、「1960年人口センサス」において採用された調査方法がどのようなものであったのかを確認することはできませんでした。しかし、念のために「1984年人口センサス」の「予備報告書」（Ghana, 1984 Population Census of Ghana: Preliminary Report）を見ますと、少なくとも「1984年人口センサス」の場合には、個々の調査員が割り当てられた調査地区（Enumeration Area）内にある家庭を一軒ずつ訪問し、その世帯主に直接インタビューしながら聞き取ったデータを調査員自身が「調査票」（Questionnaire）に記入する「面接調査方式」（canvasser method）が採用されていたことがわかります。

なぜ、日本の「国勢調査」のように世帯主が「調査票」へ記入する方法ではなく「面接調査方式」が採用されていたのかを考えてみますと、当時のガーナでは成人の識字率（adult literacy rate）が日本などとは比較にならないほど低い水準にあり、世帯主が自分で「調査票」にデータを記入することが困難だったのではないか、という事情が想定されるのです。

言うまでもなく、この面接調査方式が「1960年人口センサス」の場合にも採用されたという確証はありません。しかし、たとえば1970年当時のガーナにおいて、成人の識字率が全国平均で30％程度であったという統計数値がほぼ間違いないものとすると、それより10年前の1960年当時、その識字率が70年の識字率（70％）を超えていたと推定するには無理があります。したがって、1960年当時のガーナでは成人の7割しない、それ以上が公用語である英語の読書き能力（識字能力）を持たない「文盲」（illiterate）であったと推定しても、それほど不自然ではないでしょう。

しかし、問題はそれほど単純ではありません。なぜなら、ここで引用した識字率の統計数値は、あくまで「成人の全国平均」であって、英語の読書きを学ぶのに必要な学校や識字教室あるいは成人学級などの教育施設の普及が遅れていたコプリソ村のような農村部では、それを普及整備が進んでいた都市部に比べると成人の識字率が相対的に低かった、と推定できるからです。

事実、私が1962年にコプリソ村を訪れて、聞き取り調査を実施するのに必要な英語の通訳を探したところ、村にある小学校の教員のほかにはジェンフィ氏（Mr. Jenfi）という青年しか通訳できる成人が見当たらなかったのです。

このような状況のもとで、農家の世帯主が自身自身で「調査票」に記入する方式を探れば、英語の識字者であるジェンフィ氏の他に村人の中には誰も「調査票」を完成することのできる者はいなかったのではないでしょうか。

その意味でも、1960年当時のコプリソ村のように成人の大多数が英語の識字者ではない状況のもとで「人口センサス」を実施しようとするならば、調査員のような英語の識字者が世帯主から聞き取ったデータを「調査票」に記入する「面接調査方式」を採用する以外になかったと推定できますから、「1960年人口センサス」も84年の場合と同じように「面接調査方式」が採用されていた、と考えてもよいのではないでしょうか。

このような推測が誤りではないとすれば、「1960年人口センサス」調査のためにコプリソ村を訪れてきた調査員とコフィ氏が直接、出会うことができたであろうと推定することができます。

(1) コフィ氏は「人口センサス」の調査目的を知ることができたと言えるのか

これまでに述べてきたところから、1962年にコプリソ村を訪ねた私に対してコフィ氏が質問した言葉の含意、すなわち「ガーナ政府の役人と（人口センサスの調査員）が、家族全員の氏名から年齢、性別、学歴などといった項目について調査するというのであれば、自分（コフィ氏）に
試論：ガーナ・コブリソ村における「原体験」の客観的普遍性の論証において（細見） —11—

は既に、その調査目的がわかっています」という私の解釈を具体的に論証する手がかりが得られ
たのではないか、と思います。

つまり、1962年の時点で「コフィ氏が既に調査員の調査目的を知っていた」という私の解釈
が単なる推測ではなく客観的事実であると言うためには、コフィ氏がその調査員に対して「調査
の目的は何なのか」と質問するなそして、その目的を知ることができたことを具体的な論証を挙
げて論証しなければならないのです。

この問題を論証するためには、「調査の目的は何なのか」というコフィ氏の質問それ自体を具
体的な疑問にすることが必要になります。そこで、再び「1960年人口センサス」の調査項目を
見てみますと、家族全員の氏名から性別、年齢、学歴などというように多種多様な項目があるこ
とがわかります。その後から、とりあえず「年齢」という項目を取りあげ、コフィ氏が政府の
役人である調査員に向かって「なぜ、私たちコブリソ村の住民の年齢を調査するのですか？そ
の目的を説明していただけませんか？」などと質問する必然性があったと言えるか否かを検討し
たいと思います。

この場合、調査員が住民の「年齢を調査する」と言えば、読者諸賢は、調査員が世帯主からそ
の家族全員の生年月日を聞き出すなどして、そのデータ（年齢）を「調査票」に記入することだ
と思像されるかもしれませんが。ところが、ガーナ政府が公刊した「1960年人口センサス」の
『調査報告書』を見ると、この「年齢」というデータは、すべてがそうしたとは言えないにして
も、面接調査（調査員とのインタビュー）を通じて世帯主が調査員に申告した年齢ではなく、村
の村長や長老がその地域の歴史的出来事（例えば、先代村長の葬儀とか、現村長の就任式など）
があった年次を基準にして推定した年齢であったり、住民の頭髪や皮膚といった身体の状態を調
査員が観察して、白髪の「混じり具合」とか皮膚の「たるみ具合」などから推定した年齢であっ
て、いわば第三者の記憶や推測にもとづいた年齢であることがわかるのです(85)。

年齢というデータが、このような方法によって収集されていたのが事実であるとしますと、
ガーナの住民がその年齢や生年月日というものを正確かつ厳密に記録したり記憶する必要性を感
じてこなかったのではないか、という推測が成り立つのではないでしょうか。

事実、1970年に公表された「人口センサス」の場合でも、世帯主の多くは調査員に対して、
自分自身の年齢や家族の年齢を「知らない」とか「記憶しない」となどと回答したことが報告され
ています(86)。

さらに、この推測を裏付けるデータが、ガーナ政府が公刊してきた学校教育に関する統計資料
にも見られます。例えば、1965年と76年にガーナ政府の中央統計局が公表した『教育統計』
(Educational Statistics)と見ますと(87)、少なくとも1960年代と70年代のガーナでは、義務教
育の開始年齢として6歳という年齢が政府によって公式に規定されているにもかかわらず、実際
に小学校に就学した新入生の年齢は5歳から10歳以上にまで広く分散していたことがわかります。
これが事実だとすると、ガーナの住民たちは、自分の子弟を小学校に就学させるかどうかを
判断する場合、政府が公式に規定している6歳という年齢を基準にしてはこなかった、と推定す
ることができないのではないでしょうか。

少なくともこれまで考察してきたところから、ガーナの辺地とのあいだでは、もちろん例外は
あるとしても、自分たちの年齢や生年月日を正確かつ厳密に記憶したり記録することが必要だと
か重要だとと見ると「考え方」（つまり、「年齢観」）が非常に希薄であったか、そのような「考
え方」がほとんど存在しなかったと言ってもよいのではないでしょうか。
仮に、そのような推測が成り立つとすれば、1960年に「人口センサス」のデータを収集するためにコッパリ村を訪れてきた政府の調査員が、村人たちすべてについて、その正確な「年齢」を聞き取ろうとする態度を見たコッフ氏たち村人が「なぜ、われわれの正確な年齢や生年月日を知る必要があるのだろうか？」というような疑問を感じ、調査員に対して調査の目的を質問したとしても決して不思議なことではありません。

(2) コッフ氏には質問する必然性があったと言えるのか
次に確かめなければならない点は、果たしてコッフ氏には「人口センサス」の調査員に年齢を調査する目的を尋ねなければならない必然性または明確な動機があったか、と言えるか否かです。この問題を考える場合、私たちはコッフ氏がコッパリ村の村長代理であったという事実を、改めて想起する必要があります。なぜなら、調査員が村人たちの年齢や生年月日を調査する場合、既に述べたように、村長や長老などの尋ねするのが一般的な方法であったとされていますから、「1960年人口センサス」がおこなわれた当時、コッフ氏がコッパリ村の村長代理であったとしますと、調査員から「あの家の方の年齢は何歳なのか？」とか「あの家の娘の年齢は何歳なのか？」などというように、ほとんど同じ内容の質問を繰り返し執拗に受けたであろうことが推測できるからです。

そのように、自分が必要だと考えたり、それを意識したこともなかった年齢や生年月日について、同じこと（質問）を繰り返し尋ねられると私たちは誰でも、その「執拗さ」を異様に感じるのが普通ですから、村長代理であったコッフ氏が「それほどまでして、村人たちの年齢を知ることが、なぜ、ガーナ政府にとっては必要なのだろうか？」などという疑問を、ほかの村人たちよりも一層強烈に感じたとしても不思議ではありません。

ここに至ってようやく、私たちはコッフ氏が「1960年人口センサス」のためにコッパリ村を訪れた調査員に対して「政府の役人であるあなたは、何の目的で私たち村人の年齢や生年月日を調査しようと思うのですか？」などという主旨の質問を投げかけたであろう、と推測できる論拠を示すことができました。

(3) コッフ氏が質問したのは客観的事実であったと言えるのか
問題は、コッフ氏の質問がコッフ氏と調査員とだけの間でいわば「非公開」に私的または個人的な質問として出されたものなのか、それとも、多数の村人たちが見守っている「公開の場」でおこなわれた客観的事実であったか否かという点ですが、結論的に言えば、この質問は公開の場でおこなわれた客観的事実であったのではないか、と私には推測できるのです。

なぜ、そのように推測することができるのかと言えれば、これまで述べてきたところからも明らかのように、年齢や生年月日を記憶したり記録することが必要ではないとする「考え方」ないし「年齢観」は、コッフ氏だけが持っていた特殊なものではなく、村人たちすべてに共有されてきた「考え方」ではないかと思われるからです。つまり、年齢というものは特別に意識して記憶したり記録しなければならないほどの重要なものではないという「年齢観」が村人たちの常識であったとしますと、年齢を執拗に聞き出したり調査しようとする調査員の態度や言動は、村人たちから見れば「非常識」で「異様」な言動だというように受け取られる可能性が強いと考えられます。その結果、村人たちが調査員に対して謂われのない不信感（不審感）を持ったり、場合によっては、調査に協力しない者も出てくる可能性がありますから、村人たちの不信感を少しでも
解消することによって、調査員を快く受け入れ「人口センサス」に協力する雰囲気をつくるためにも、また自分自身の疑問を解消するうえでも、村長代理という立場にあったコフィ氏には多数の村人たちが見守っている「公開の場」で調査の目的が何なのかを質問することによって村人たちの不信感を払拭することこそが必要だったのではないか、と推測することができるのです。

(注4) 少なくとも「1984年人口センサス」の場合には、小・中学校の教員や地方自治体の官吏などのような知識人が調査員として登用されたのである（Ghana, 1984 Population Census of Ghana: Preliminary Report, ibid., p.17）。
Kodwo Ewusi, Planning for the Neglected Rural Poor in Ghana, University of Ghana, Legon, 1978, p.24

結びにかえって

本稿では、ガーナのコプリソ村で遭遇した「原体験」を取りあげ、①コフィ氏の質問によって私が感じた「強烈なショック」と、②コフィ氏が質問したという2つの主観的で個別特殊な経験的事実について、それが普遍性をもった客観的事実であることを論証するようにみえてきました。

その結果、「原体験」に遭遇するまでの私は「調査研究の目的」を公開の場で問われたという経験がなく、調査研究の目的を「問わない」のを常識と見なすような社会に生きてきたのではないかということを明らかにしました。他方、コフィ氏の質問がコプリソ村の人々が見守る公開の場で私に投げかけられた客観的的事実であったことを推論によって示すことにより、少なくとも1962年当時のコプリソ村の人々のあいだには「調査研究の目的」を公開の場で問うことが常識であるかに見なされていたのではないか、ということも明らかにしてきました。

これが事実であるとしますと、①コプリソ村の人々は、専門の研究者ではなく、まったくの「素人」であるにもかかわらず、なぜ「調査研究の目的」を問うことを当然の常識であるかのように考えてきたのか、という疑問と②私たち日本の研究者は、なぜ、互いに調査研究の目的を問わないことを当然の常識であるかのように見なしてきたのか、という2つの疑問に当面せざるを
得ないのです。

そこで、改めて「調査研究の目的」を問うことが何を意味するのかを考えますと、それは当事者である研究者が何にもとづいて調査研究の結果（成果）を予測しているのかという、予測の根拠や論拠を問うことであると考えられます。なぜなら、調査研究の目的とは、調査研究するという行為によって、どのような結果（成果）が得られるかを当の研究者自身が予測したり推測したものにほかなりませんが、その予測それ自が客観的に普通の論拠にもとづいたものであるという保証がなければ科学的な成果にはなら得ない、と考えられるからです。

しかも、専門の研究者でもなく「素人」であるはずのコブリソ村の人々が「調査研究の目的」を問うことを常識であるかのように考えてきたのが事実であるとしますと、専門の研究者を含めたすべての人間には、客観的で普遍的な論拠を欠いたまま、いわば独善的に物事を誤って予測するという弱点があることに気づいており、彼らにはそのような人間観があった、と言っても過言ではないでしょう。

それが事実であることは、コフィ氏から調査の目的を尋ねられるまでの私が学生時代の農村調査実習とかアジア経済研究の研究会などといった非常に限られた「経験的知識」だけをガーナのコブリソ村においても通用する普遍的な根拠であるかのように錯覚したり妄信して、「コフィ氏が調査の目的を尋ねてくることは絶対にありえない」というように独善的で独りよがりな予測をしていた（あるいは、そのような予断をもって行動していた）ことが「苦い経験」の原因となったことを見れば明らかでしょう。